

機関番号：14301

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520151

研究課題名 (和文) 日本近代文学館所蔵芥川龍之介文庫和漢書の書き込みに関する文献学的研究

研究課題名 (英文) A Philological Study on Notes in Japanese and Chinese Books of Akutagwa Ryunosuke Library in the Museum of Modern Japanese Literature

研究代表者 須田 千里 (SUDA CHISATO)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：60216471

研究成果の概要 (和文)：日本近代文学館所蔵の芥川龍之介文庫の和漢書 465 点 1822 冊と、葛巻義敏寄贈本 4 点の書き込みを調査した結果、芥川によると考えられる書き込み 36 点、その他何らかの書き込みのあるもの 93 点、頁の折られた箇所 (または折り跡) のあるもの 290 点があることを明らかにした。芥川の書き込みや判明した材源については論文として発表、または紹介した。また、『破邪叢書』第一集が『るしへる』の、『日本に於ける公教会の復活 前篇』が『じゅりあの・吉助』『おぎん』『黒衣聖母』の、それぞれ材源となっていることを明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：As a result of having investigated the notes of 465 books in Japanese and Chinese books of the Ryunosuke Akutagawa library at the Museum of Modern Japanese Literature, I clarified 93 books of things with some kind of notes, particularly 36 books of notes that it was thought by Akutagawa, and 290 books with the turned down (or the track) of the page. I gave a presentation on the notes, and sources of the works of Akutagawa as articles or, introduced them. For example, Haja-sosyo (破邪叢書) became the source of "Rusiheru (the Lucifer)", "The revival of the Catholic Church in Japan, first part" also became the source of "Juriano Kichisuke" "Ogin" "Holy Mother in black".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：芥川龍之介、日本近代文学館、和漢書、書き込み、『偷盗』、『るしへる』、『じゅりあの・吉助』

1. 研究開始当初の背景

(1) 2006 年度までに予備調査を行った結果、芥川龍之介による書き込みがかなり見られることが判明した。従来、洋書の書き込みの紹介はなされてきたが、和漢書については未

調査であり、紹介もされていないので、これを紹介すべきであると考えた。芥川の書き込みであれば、いずれは全集にも収録されることが予想された。

(2)読書家の芥川は、様々な書物から知識や教養を得るのみならず、作品の発想を得ることもあったから、材源(種本)の解明にもつながると考えた。

2. 研究の目的

(1)日本近代文学館に所蔵される芥川龍之介文庫は、芥川の手沢本和漢書 465 点、1822 冊という大量のコレクションである。これに逐一あたってその書き込みを調査、翻刻して紹介する。

(2)芥川文庫所蔵の和漢書を通覧することで、芥川文学の材源を考察する。さらに、未所蔵であっても、芥川文学の材源となった書物を探索し、未詳であった材源を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)日本近代文学館の芥川龍之介文庫所蔵の和漢書に逐一当たり、全頁閲覧して書き込みがないか、筆跡は芥川のものか、また頁を折った箇所はないか、調査する。芥川によると推測される書き込みについては翻刻し、紹介する。

(2)上記の作業と併せて、所蔵の和漢書に拠って発想された作品がないかどうか、考察する。さらに、旧蔵書以外でも、材源となったものがあればそれを明らかにする。

4. 研究成果

(1)4年間の調査の結果、芥川龍之介文庫和漢書 465 点および葛巻義敏寄贈本 4 点の調査を完了した。以上の調査に基づいて、主な書き込みの紹介と、それに関する考察を行い、論文 3 点を発表した(下記 5. 参照)。

(2)まず、論文①『今昔物語集』の内と外―『羅生門』『偷盗』をめぐって』では、芥川が『偷盗』(大正 6 年)で使用した平安時代の京都の地図が、芥川文庫所蔵「中古京師内外地図」(明治 34 年)であることを明らかにした。平安時代を舞台とした本作品に、元享元年(1321)開基の立本寺が出てくる謎がこれで解決した。

(3)論文②「芥川龍之介文庫和漢書の書き込みについて」では、芥川が読了日を記した『虞初新志』以下 8 点を紹介した上で、以下の 14 点に見られる芥川の書き込みを翻刻紹介した。すなわち、『改正 新編漢文教科書』『虞初新志』『浙西六家詩鈔』『唐詩絶句』『蘇文忠公詩集挾粹』『精刊唐宋千家聯珠詩格』『旧小説』『青邱高季迪先生絶句集』『絵図情史』『樊川詩集』『芭蕉全集』『平田篤胤之哲学』『甌北詩選』『寒山詩闡提記聞』である。さらに、『春服』訂正版の実態、芥川の記した

圈点や、芥川への献呈本に記された他作家の献辞について具体的に紹介し、考察した。その他、『旧小説』所収『簷曝雜記』『独秀山黒猿』が、『文芸雑話 饒舌』で芥川が紹介する「通臂猿」の話の出所であることを明らかにした。また、「旧幕府御定書」と墨書された仮綴の本(叢書『百万塔』を合綴したもの)に収録された「近代公実厳秘録」が『忠義』(大正 6 年)の典拠であることを確認した。

(4)論文③「芥川旧蔵『芭蕉全集』と「芭蕉雜記」」では、『芭蕉全集』(大正 10 年)の「連句集」「遺語集」に見られる○印やカギカッコなどを紹介し、これらが、芥川が「芭蕉雜記」(大正 12~13 年)「続芭蕉雜記」(昭和 2 年)執筆に当たって参照し、作品中に引用するための心覚えの印であることを具体的に跡づけた。

(5)芥川の書き込みのある和漢書は、(3)で挙げた 15 点のほか、『遺山先生詩鈔』『絵図歴代神仙伝』『黄檗山諸堂聯額』『韓内翰香奩集』『峨山逸話』『雁門絶句抄』『宮詞』『興替宝鑑』『支那 歴代名画論評』『朱淑真断腸詩集』『清十家絶句』『二十四家選 清二十四家詩』『秦淮画舫録 附画舫余談 三十六春小譜』『醉古堂劍掃』『風流天子伝』『春城句集』『ボヘミヤ歌』『陳眉公批西廂記原本』『桃花扇傳奇』『唐李長吉歌詩』(以上芥川文庫蔵)、『チユルヂス夫人』(これのみ葛巻義敏寄贈本)の計 36 点である。この他に、何らかの書き込みのあるものは 93 点、頁の折られた箇所(または折り跡)のあるものは 290 点存在することが判明した。古書として古本屋から購入したものが多かったため、また、芥川の生誕前から芥川家に所蔵されていたものも交じっていたため、旧蔵者など別人の書き込みが多く混在したと考えられる。

(6)芥川の書き込み 36 点の内訳は漢籍が多数を占め、和書は『芭蕉全集』『平田篤胤之哲学』『春服』『春城句集』『ボヘミヤ歌』の 5 点、翻訳はメリメ『チユルヂス夫人』の 1 点のみということになる。漢籍に多いということは、洋書の場合と同様、芥川が勉強の成果として感想の書き込みや注記をしたためと考えられる。和書の場合、わざわざ書き込みをしなくても、心覚えのため頁を折るなどすれば、強記の芥川は記憶に留められたのではないかと推測する。

(7)以上に述べたような、芥川文庫所蔵の和漢書における書き込みの有無、折られた頁の有無、書き込み内容の紹介、各書物の概略については、「芥川龍之介文庫書き込み調査」として 57 頁の報告書を作成した。これに、後述する論考編 50 頁を併せて 107 頁を印刷し、

日本近代文学館はじめ、希望があれば関係図書館、芥川龍之介文学の研究者らに頒布する。

(8)次に、平成 22 年度の成果として、『るしへる』(大正 7 年)前半の材源が神崎一作編『破邪叢書』第一集(明治 26 年)であることを明らかにした。すなわち、『るしへる』で引用される『破提宇子』が『破邪叢書』所収版と一致すること、芥川によるその解説が、同書の編者神崎一作による「緒言」(解題)の内容と酷似すること、さらに、『るしへる』の「佐關第三關裂性」からのエピグラフも、『破邪叢書』所収『杞憂小言』(淮水老杜多述、明治元年)下に見えること、などから両者の関係は明白である。特に、『るしへる』で誤って引用された箇所が、『杞憂小言』の引用部と一致することは、本作がこれに拠ったことの強い根拠となる(たとえば、「るしへる」の名が「佐關」では「輅齊弗兒」なのに、芥川も『杞憂小言』も「輅齊布兒」としている)。「佐關」や『破提宇子』三段の、人の「邪魔をなさす」絶対的な悪「るしへる」に対して、本作のそれは「悪魔亦性善なり」と、善悪に引き裂かれた存在として逆転させているのであり、ここに本作の主眼があった。中世の日本に現れた「るしへる」は、近代的デカダンスを具現した存在なのである。このように、芥川固有のテーマが『るしへる』後半部にあることはいうまでもないが、『破邪叢書』第一集所収の『破提宇子』や「佐關」を用いた前半部は、後半部の現実性を保証するまことしやかな外枠として機能しているのである。

(9)『じゅりあの・吉助』(大正 8 年)の材源は、浦川和三郎『日本に於ける公会の復活前篇』(大正 4 年。以下『復活』と略)である。従来は、その素朴な祈祷文のみ類似しているとされてきたが、次の点から、芥川が本書に拠ったことは明らかである。すなわち、奉行の尋問に吉助は、「さる海辺」で自分に洗礼を施した「紅毛人」が「折から荒れ狂うた浪を踏んで、いづ方へか姿を隠し申した」と答えるが、『復活』「第十八章 九州各地方に於ける昔の切支丹」「三 バスチアの伝説」にも、黒船の甲比丹「ジワン」が焼き討ちにあつて「港口の福田に泳ぎ上り」、菩提寺の小僧であつたバスチアンに洗礼を施した後、「もう国へ戻る」と言つて「バスチアンと離別の水杯をして浜辺に下り、海上を歩いて、遠く沖間に消え失せて了つた」とある。また、吉助は教義について、「えす・きりすと様、さんた・まりあ姫に恋をなされ、焦れ死に果てさせ給うたによつて、われと同じ苦しみに悩むものを、救うてとらせうと思召し、宗門神となられたげでござる」と説明するが、『復活』「第十五章 浦上に於ける昔の切支

丹」「二 信者団の組織」に、ローマの聖会の入り口で聖人たちが毎日交代して門番をすることを述べ、「日曜日には聖ミギル様、[略]土曜日にはアメン ジウス様、と云ふ順である。して此アメン ジウス様は或国の王子で、聖マリヤを恋ひ慕ふの余り焦死にした御方ださうなと称して居た」とある。「アメン ジウス様」とは、「主イエズ」を「ジーズ」或は「ジウス様」だの、「御身様」だのと称し、聖母は「聖マリア様」と呼んで篤く之に倚頼み」とあることから、キリストを指すとわかる。浦上では確かに、キリストとマリアの恋物語が伝わっていたのであり、吉助の教義はこれに拠ったものと考えられる。

(10)『おぎん』(大正 11 年)にも、『復活』中の祈祷文が使われていた。しかしそれだけでなく、作中のクリスマスの描写も本書第 15 章の 2 に拠っている。すなわち、ある年の「なたら(降誕祭)の夜」の孫七の家の描写として、「大きい囲炉裡に、「お伽の焚き物」の火が燃えさかつてある。[略]後ろの牛小屋へ行けば、ぜすす様の産湯の為に、飼桶に水が湛へられてある」とあるのは、『復活』の「年中に最も盛に祝ふのは御降誕(ナタラ)で、もう二三週間ぐらみ前から山に出て、「お伽の薪(たきもの)」を拾ひ集めて用意をする。[略]御子様の産湯の水にとて、飼桶に水を盛つて牛小屋の前に置き、御子様が凍えなさらぬ様にと爐(いろり)には兼ねて用意の薪(たきぎ)を山程も折りくべて通夜するのであつた。」に依拠する。特に、『おぎん』では意味の取りにくい「お伽の焚き物」が、『復活』の「お伽の薪」を不用意に利用したためであることは見逃せない。『復活』を読んで初めて、これが、御子を凍えさせぬよう一晚中火を燃やし続けるために、数週間前から山で集められた大量の薪のこととわかるのである。さらに、おぎんの信仰に触れた箇所や祈祷文も、『復活』の「附録 浦上、外海地方の信者間に伝はつて居た祈祷文」中の「ケレンド(信徒信経)」「サルベンジナ(憐みとも称す)」、及び「生月島に伝はつて来た祈祷文」中「二十、十一ヶ条」のうちの「第八」「第十」を適宜繋ぎ合わせたものである。

(11)従来、『おぎん』のテーマは、孝心という日本的な心情とキリスト教との対立・葛藤とされ、その発想源として、フランシスコ・ザビエルの書簡集が挙げられてきた。しかし、本作成立当時には翻訳がない点が問題であつた。調査の結果、『復活』「第二十一章 信者の熱心なる教理研究」「四 浦上信者の熱心」の「浦上の信者に殊更ら勝れて目立つのは、死者の為に祈る熱心で、彼等が世を去れる父祖の靈魂の為に心配すること」云つたら信じ難い程であつた。」や、ジャン・クラ

ッセ『日本西教史』2章で「新入の耶蘇教徒等」が「真神の在ることを知らざりし我儕の祖先等は永久地獄の火中にあるべきかと」苦悩・号泣した話、さらに渡辺修二郎『内政外教衝突史』（明治29年）第九章「伝教師と日本人民＝新入宗教と古来道德との衝突＝教師、信徒、並に教院の数」に見える、「西書の記する所」の「長崎に於て、十三歳の童子が、奉教の為に磔刑に処せらるゝに当り、其父母痛く之を悲みて見るに忍びず、法教を棄てゝ死を免るべきことを論したれども、児は之を聴かずして死に就きたる事」などに拠ったと考えられることを明らかにした。

(12) 『黒衣聖母』（大正9年）のエピグラフも、『復活』の「サルベンジナ（憐みとも称す）」に拠っている。また、本作における「麻利耶（マリヤ）観音」に関する説明も、本書17章に於ける説明と類似する。さらに本作で、祖母が重い麻疹に罹った孫の茂作を救おうと、「せめては私の息のございます限り、茂作の命を御助け下さいまし」と祈ったところ、麻利耶観音は約束通り、翌日祖母が急死するまでは茂作の命を奪わなかった、との構想も、『復活』18章に拠った可能性が強い。宣教師「ジワン」（前掲）が、「「卿（あなた）は何方が欲しい、現在ですか、後世ですか」と尋ねた。庄屋は未信者でもあつたものか「後世なぞ当にはなりません、私は現世が欲しい」と答へたから、「では卿の家は三代までは大丈夫続きます」と曰つたが、果して三代してから其庄屋は潰れたと言ふ話である」とある。「三代までは続く」という言い方は、裏を返せば「三代で亡びる」ということであり、これは「祖母が生きている間は茂作も生き続ける」という約束が、裏を返せば「祖母が死ねば茂作も死ぬ」であるのと同じ発想である。願いを聞き届けるのが伝説の宣教師、もしくは麻利耶観音であり、いずれも切支丹と関連することも共通する。

(13) 『奉教人の死』（大正7年）で、追放された「ろおらん」が、「住み馴れた」寺院（「えけれしや」）へ詣でていたのを誰一人知らなかったのも「ことほりかな、破門の折から所行無慚の少年と思ひこんで居つたに由つて、何として夜毎に、独り「えけれしや」へ参る程の、信心ものぢやとは知られうぞ」や、続く、「ろおらん」の私通相手とされた傘張の娘の産んだ子を「かたくなしい父の翁」も可愛がり、「しめおん」も「無骨な腕」に幼子を抱いて「にがにがしげな顔」に涙を浮かべ、「ろおらん」の面影を慕っていた、との場面は、新村出『南蛮記』（大正4年）所収「南蛮本平家物語抄」第十一「木曾が猫間殿に会うてのぶしつけと、車に乗つて牛に曳きづられた事。」の次の場面に拠っている。すな

わち、「木曾は都を守護して居たが、顔はにが／＼しい男であつたれども立居振舞の無骨さ、物いふ言葉つきのかたくなしいことは限りもござなかつた。道理かな、二つの歳から信濃の国の木曾といふ山里に三十まで住みなれたれば、なんととして礼儀をば知られうぞ？」とある（傍線、須田）。芥川が特にこの木曾義仲の描写に注目したのは、『義仲論』（明治43年）に「直情径行、[略]慕ふべき情熱あり、掩ふ可らざる真率あり」などと言うように、親近感を寄せていたためであろう。比定された「しめおん」は、義仲同様武士階級出身で剛力、一度は「ろおらん」に裏切られたと勘違いして撲るものの、後に火中から救い出し、その思いを知って涙するような「直情径行」な人物である。

(14) 以上の(8)～(13)は論文「芥川龍之介「きりしたん物の材源——『るしへる』『じゅりあの・吉助』『おぎん』『黒衣聖母』『奉教人の死』——」として学術雑誌に発表予定である。これと、既発表の論文3編を併せた論考編は、計50頁。前記(7)の報告書57頁と合わせて107頁から成るのが全体の報告書である。

(15) 上記で指摘した『破邪叢書』第一集や『日本に於ける公教会の復活 前篇』は、いずれも芥川龍之介文庫に所蔵されていない。ほかに、例えば『蜘蛛の糸』（大正7年）の材源であるポール・ケーラス著、鈴木大拙訳『因果の小車』（明治31年）は芥川文庫に未所蔵である。芥川は、安易に種本が見つけられないよう自身で注意し、適宜処分したりしていたのではないだろうか。つまり、現在残された芥川文庫、特に和書の部については、芥川の閲読した書物全体の数パーセントに過ぎない可能性が強い。何となれば、雑誌はすべて残っていないし、初期の王朝物（『羅生門』『鼻』『偷盗』『地獄変』など）に材源を提供した『校註 国文叢書』も所蔵されていないのである。

(16) 材源探索の範囲を、和漢書から洋書に拡大すると、さらなる典拠が判明する。従来材源の不明であつた『さまよへる猶太人』（大正6年）は、S. Baring-Gould の“Curious myths of the middle ages”に拠っていることがわかった。本書は、1866・68年に上下巻が出版されて以来、1914年までに35版を重ねた、ヨーロッパ中世の神話・伝説に関する名著である。松村武雄編『神話伝説大系』第3巻（昭和3年）所収「さまよへる猶太人（その二）」の註にも、この伝説について「バーリング・グールド氏が、その著『中世紀の珍奇なる神話』（S. Baring-Gould, Curious Myths of the Middle Ages）の第一章に於ておいて、委しくこれを研究してゐる」とあり、

基本的な文献であった。本作は、その第1章「The Wandering Jew」との内容の一致はもとより、本作で言及される「ウルスラ上人と一万一千の童貞少女が、「奉公の死」を遂げた話や、パトリック上人の浄罪界の話」、また初出にありながら単行本で省かれた「メルジナと云ふ人魚」の話、「ハットオ僧正に関する話」も、本書のそれぞれ第14章「St Ursula and the Eleven Thousand Virgins」、11章「St Patrick's Purgatory」、19章「Melusina」、18章「Bishop Hatto」に見えるなど、材源となったことは明らかである。芥川は、さまよえるユダヤ人が各地で目撃され、さらにはアラブでも「アラア アクバル」と祈祷したことから、切支丹時代の日本にも現れたとの発想を得たのであろう。また、罪悪感を抱いたが為にキリストの呪いが実効化し、永遠にさまようべく運命付けられたとする点は、一見芥川独自の発想に見えるが、実は本書にも同様の記述があり、これを敷衍したものであった。本書は、芥川文庫の洋書中にみえず、東大にも本作執筆時には所蔵されていなかったため、芥川自身が買って種本としたものと推測される。芥川は当時、『煙草と悪魔』（大正5年）のように民間伝承に興味を抱いており、本書に着目したのであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 須田千里、『『今昔物語集』の内と外——『羅生門』『偷盜』をめぐって』、『国文学解釈と鑑賞』、査読有、第72巻9号、2007年、35~42頁
- ② 須田千里、「芥川龍之介文庫和漢書の書き込みについて」、『日本近代文学館年誌資料探索』、査読有、第5号、2009年、27~44頁
- ③ 須田千里、「芥川旧蔵『芭蕉全集』と「芭蕉雑記」」、『国文学 解釈と鑑賞』、査読有、第75巻2号、2010年、65~72頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

須田 千里 (SUDA CHISATO)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：60216471